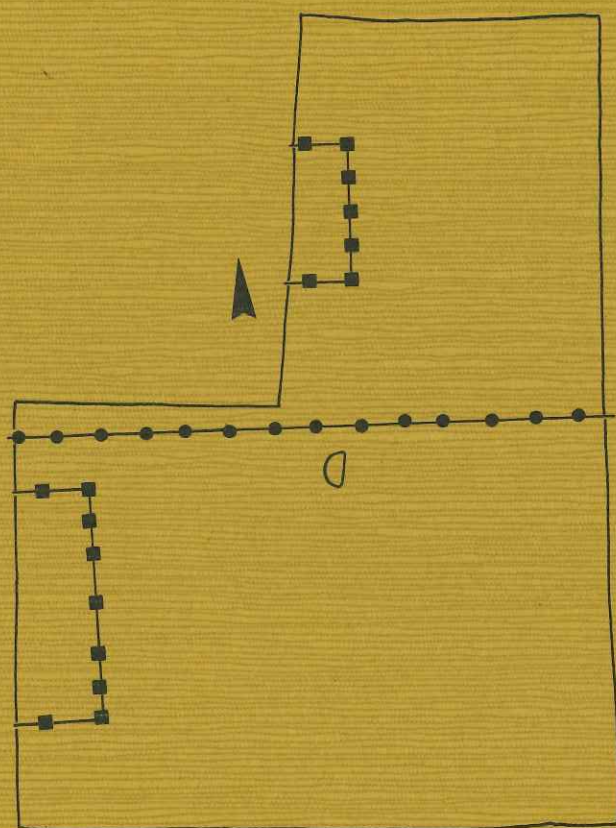


栗東町埋蔵文化財調査

1995年度 年報Ⅱ

— 手原遺跡 —



手原遺跡Ⅳ－a期遺構略図

1997

栗東町教育委員会

財団法人 栗東町文化体育振興事業団

栗東町埋蔵文化財調査

1995年度 年報Ⅱ

— 手原遺跡 —



1997

栗東町教育委員会

財団法人 栗東町文化体育振興事業団

例 言

1. 本書は財団法人栗東町文化体育振興事業団が1995年度に実施した手原遺跡の発掘調査報告である。
2. 本書の刊行は「栗東町埋蔵文化財発掘調査1995年度年報」を補足するものである。
3. 本書の執筆は第1章を雨森智美、付章を近藤 広が行った。全体の編集は近藤 広が行った。
4. 調査体制は以下の通りである。

	協力	川波ひさゑ氏
栗東町教育委員会社会教育課	課長	乾澤 亮
	文化財保護係	係長 奥村 泰祥
		主査 清水 好洋
		主事 松本 正人
財団法人栗東町文化体育振興事業団	課長	竹村 利三
	埋蔵文化財調査課	係長 大崎 隆志
	調査担当技師	雨森 智美

5. 現地調査及び報告書作成に当たり、以下の方々に御教示を得た。(敬称略)

足利 健亮 小笠原好彦 林 博通 丸山 竜平

6. 現地および整理作業に当たり以下の方々の御協力を得た。(敬称略)

井上 恵子 井上 妙子 今村 梅子 大島 洋巳 奥村美枝子
木下 政子 木村三津子 久徳 良子 竹村ヒロ子 塚本紀代美
藤沢 静子

7. 遺構写真の撮影に当たっては松村 浩(栗東歴史民俗博物館)の御協力を得た。
8. 遺構の略号を使用する場合は奈良国立文化財研究所の方式による記号を使用した。
9. 図面に使用した方位は磁北である。
10. 本書で使用した標高はT P (東京湾平均海面高度)である。

目 次

例 言 目 次

第1章 手 原 遺 跡

1. 位置と環境	1
2. 調査の経緯	2
3. 調査の概要	3
4. 小 結	16
図 版 1 ～ 6	19

付 章

手原遺跡関連文献一覧	25
参 考 資 料	27
報告書抄録	28

第1章 手原遺跡

1. 位置と環境

手原遺跡は、滋賀県栗太郡栗東町のほぼ中央に位置し、野洲川が形成する扇状地上に位置する。遺跡内には六地蔵古琵琶湖層丘陵地に源を発する葉山川が西に向かい流れていたが、現在では付けかえられ遺跡の南端を流れている。

手原遺跡周辺では、北東に位置する辻・高野遺跡や西側の下鉤遺跡で縄文時代前期の遺構・遺物がみつまっている。中～後期には南西側の狐塚遺跡や前出の辻・高野遺跡で遺構・遺物がみつまっている。弥生時代になると、栗東町内では耕作しやすい北部の低地に集落がうつり、後期には下鉤・坊袋・中沢・小柿遺跡などに集落がひろがる。

手原遺跡から野洲川左岸にかけて集落がみられるようになるのは、古墳時代前期以降になってからで、とくに辻・高野・岩畑遺跡では古墳時代をつうじ、大集落が展開する。また、手原遺跡の南側に存在する安養寺山の西麓を中心に、馬貝や武具などを副葬する新開古墳や全長99mの帆立貝式古墳である椿山古墳をはじめとする古墳群がみられる。

白鳳～奈良時代には手原遺跡の南西約3kmの岡遺跡に栗太郡衙が比定されている。手原遺跡では白鳳時代の瓦がみつまっているほか、正南北方向の地割の存在や総柱建物群が顕著であることなどから、寺院や官衙としての性格が考えられている。さらに岡遺跡と手原遺跡の間には狐塚遺跡や安養寺遺跡があり、当該期の集落の存在が考えられる。

平安時代以降になると、手原遺跡・狐塚遺跡・高野遺跡をはじめとして各地で集落がみつまっている。近世以降には集落は旧東海道添いに集中し、現在にちかい形になると考えられる。

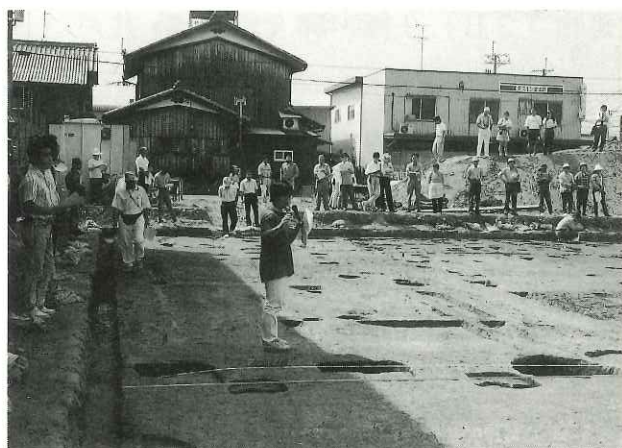


図1 調査地位置図 (1:20,000)

1. 手原遺跡
 2. 蜂屋遺跡
 3. 下鉤東遺跡
 4. 上鉤遺跡
 5. 野尻遺跡
 6. 下鉤遺跡
 7. 狐塚遺跡
 8. 椿山池ノ浦遺跡
 9. 小野遺跡
 10. 高野遺跡
- 調査地

2. 調査の経緯

今回の調査地は、滋賀県栗太郡栗東町大字手原7丁目820番地に所在する。1995年5月10日、川波ひさゑ氏により貸倉庫建設にともなう埋蔵文化財調査の依頼がだされた。申請地の周辺では古代～中世の遺構が多数検出されており、申請地に広がると判断されたため、栗東町教育委員会では本調査の実施を決定した。(財)栗東町文化体育振興事業団ではこれを受託し、1995年7月10日から10月17日まで現地調査を実施した。調査では重機により遺構面まで掘り下げ、その後精査を行い、9月9日には現地説明会を実施した。



現地説明会風景

表1 調査スケジュール

月	日	掘 削・精 査	記 録	そ の 他
7	10	重機で盛土掘削 検出	略図・写真	大雨
	12			
	19	柱穴段掘り		
	21			
	28	柱穴、溝、掘削	断面図など	
8	3	S E 8 掘削	遺構図(1/20) 作成 全景写真撮影	大雨
	10			大雨
	22			
	25			
	30			
9	1	大型柱穴段掘り	柱穴断面実測	記者発表 見学多数 現地説明会
	6			
	7	S K 234掘削		
	8			
	9			
	11	柱穴完掘		
	25	北側拡張 検出	拡張区略図	
26	拡張部遺構掘削			
10	2	大型柱穴断割り	柱穴断面実測 割りつけ 遺構図作成 全景写真撮影	撤収 完了
	4	柱穴完掘		
	5			
	6	そうじ、排水		
	7	埋め戻し		
	17	後始末など		



SB-9 掘削風景

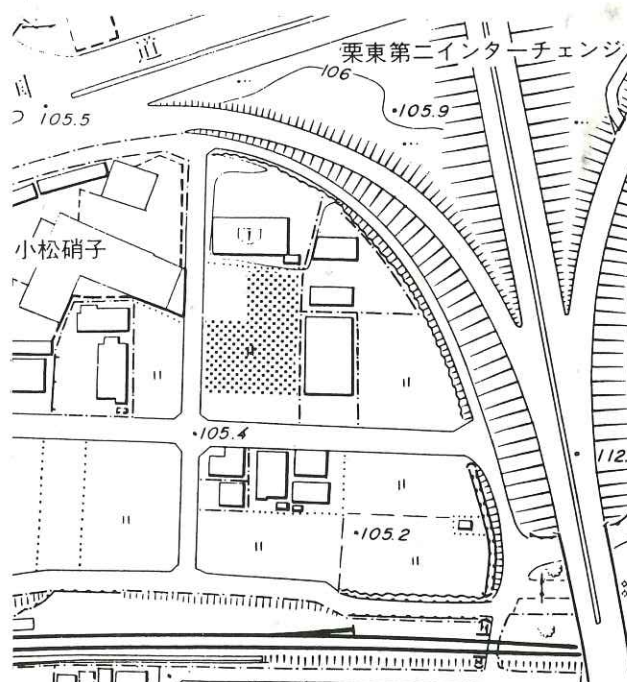


図2 トレンチ配置図 (1:2,500)

3. 調査の概要

基本土層 本調査区の遺構検出面は、北側から南側にかけて緩やかに傾斜している。最も高い調査区の北端では、造成土と若干の耕作土を掘削するとすぐに遺構面にいたる。調査区中ほどの大部分では約40cmの厚さを測る盛土の下に、黄色粘質土（層厚10cm）、褐灰色土（層厚10cm）の順で堆積し、灰褐色粘質土の遺構ベース面にいたる。調査区南端では、灰褐色粘質土がさらにおちこみ、灰茶色粘質微砂質土がおちこみ部分に堆積する。この堆積した面は、中世（12～13世紀）の遺構ベース面となっている。

検出遺構 本調査区では、塀（SA）・掘立柱建物（SB）9棟・溝（SD）・井戸（SE）1基・土坑（SK）がみつまっている。

SA-1 調査区中央で東西方向に延びる柱列である。調査区内で14間分が確認されており、調査区外に延びると考えられる。総延長は約28mを超える規模である。柱間距離は2.0～2.2mである。柱掘り方は1辺0.4～0.6mの隅丸方形で、柱痕の径は0.15～0.2m、検出面からの深さは0.4～0.5mを測る。軸方位はE-7.5°-Sである。SB-1, 2、SE-8に先行する。

SB-1 7間以上×2間の東西棟である。梁行の柱間は2.2～2.4m、桁行の柱間は1.5～2.0mである。棟方位はE-10°-Sである。建物内部には2個の小柱穴があり、建物の間仕切りをしていた可能性がある。柱掘り方は隅丸方形で、1辺約0.7～1.0mを測る。柱痕の直径は約0.2mである。

SB-2 7間×2間の南北棟である。梁行の柱間は1.7～1.85m、桁行の柱間は2.3～2.4mである。棟方位はN-10°-Eである。柱掘り方は隅丸方形もしくは不整方形で、1辺0.6～1.0mを測る。柱痕の直径は0.2mである。柱穴の深さは検出面下0.6～0.3mで、地山がレキ層となる北側ではやや浅くなる傾向がみられる。

SB-3 調査区西端で検出された6間×2間（推定）の掘立柱建物である。西側柱列は調査区外に延びるため未確認である。棟方位はN-7.5°-Eである。柱穴は隅丸方形で、1辺0.6～0.8mを測る。柱痕の直径は約0.2mである。

SB-8 西側柱列が未検出であるが、4間×2間であると推定される。桁行の柱間は

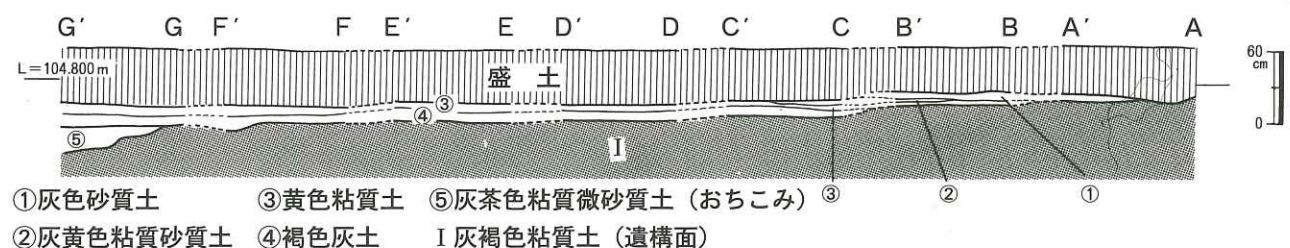


図3 調査区基本土層（西壁）

1.55~1.56m、梁行は2.0mである。棟方位はN-8°-Eである。柱掘り方は隅丸方形で、1辺0.6~0.9mである。検出面からの深さは約0.3mである。柱痕の直径は0.2mを測る。

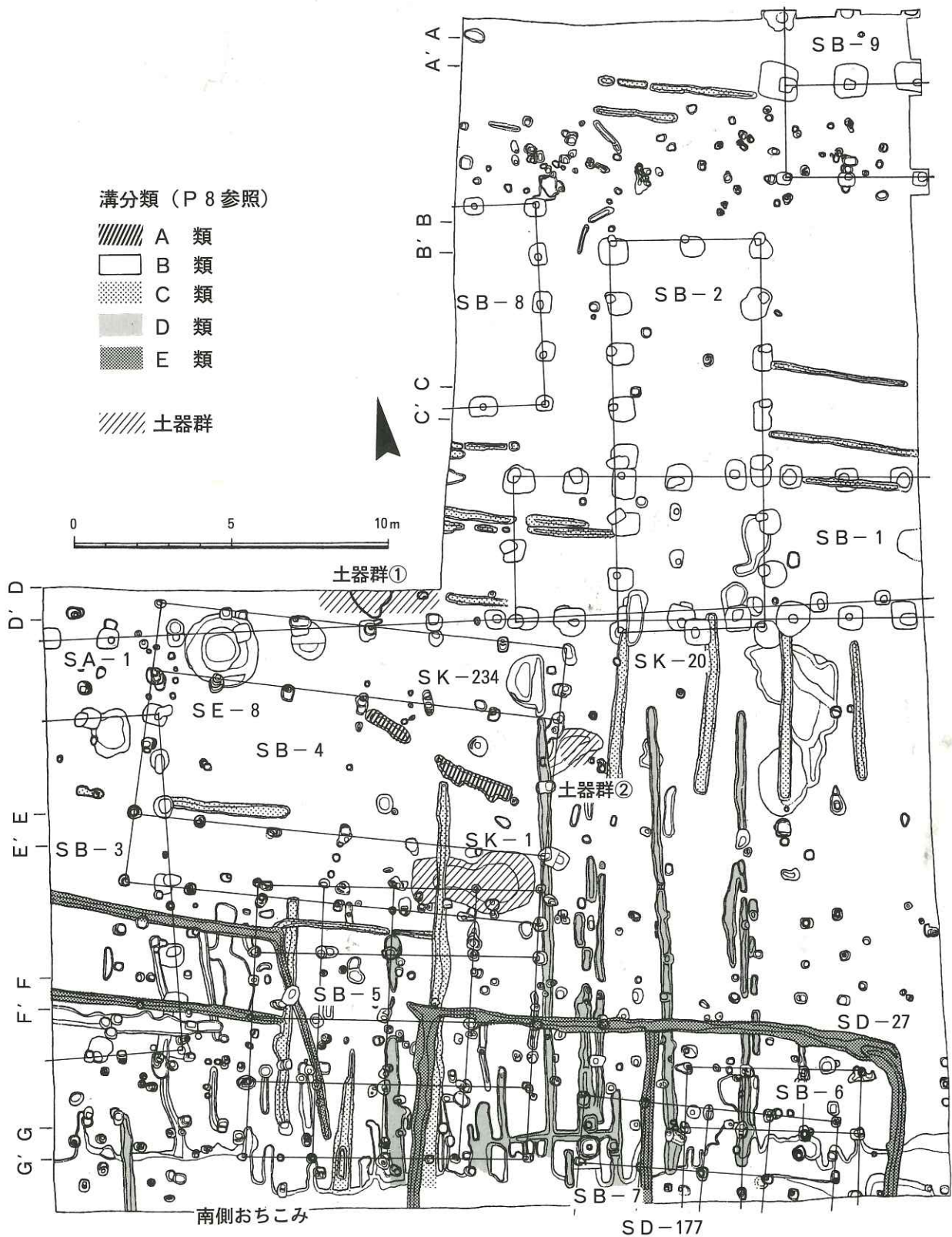


図4 手原遺跡遺構配置図

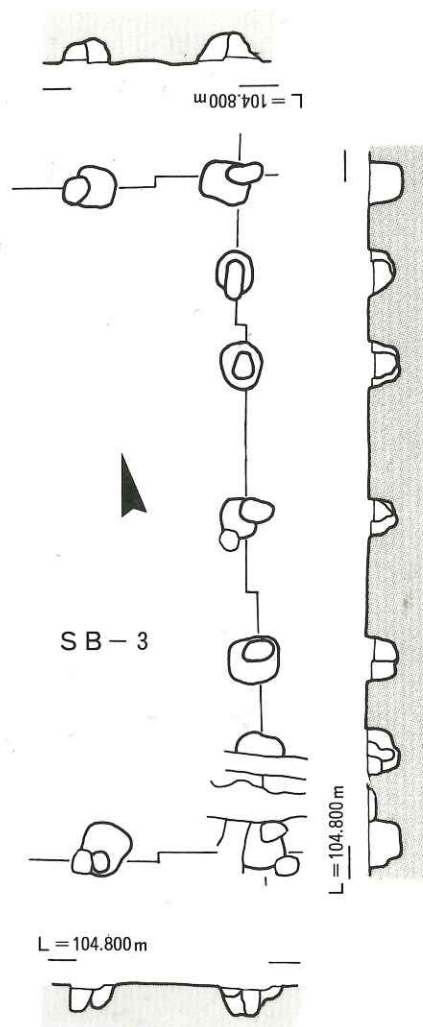
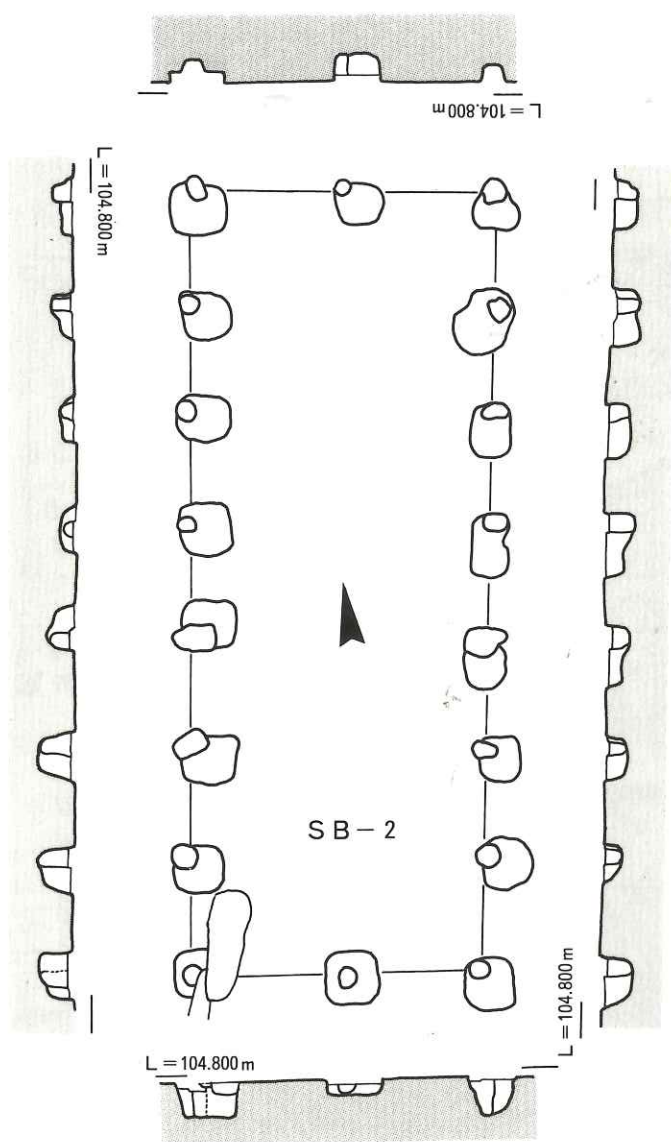
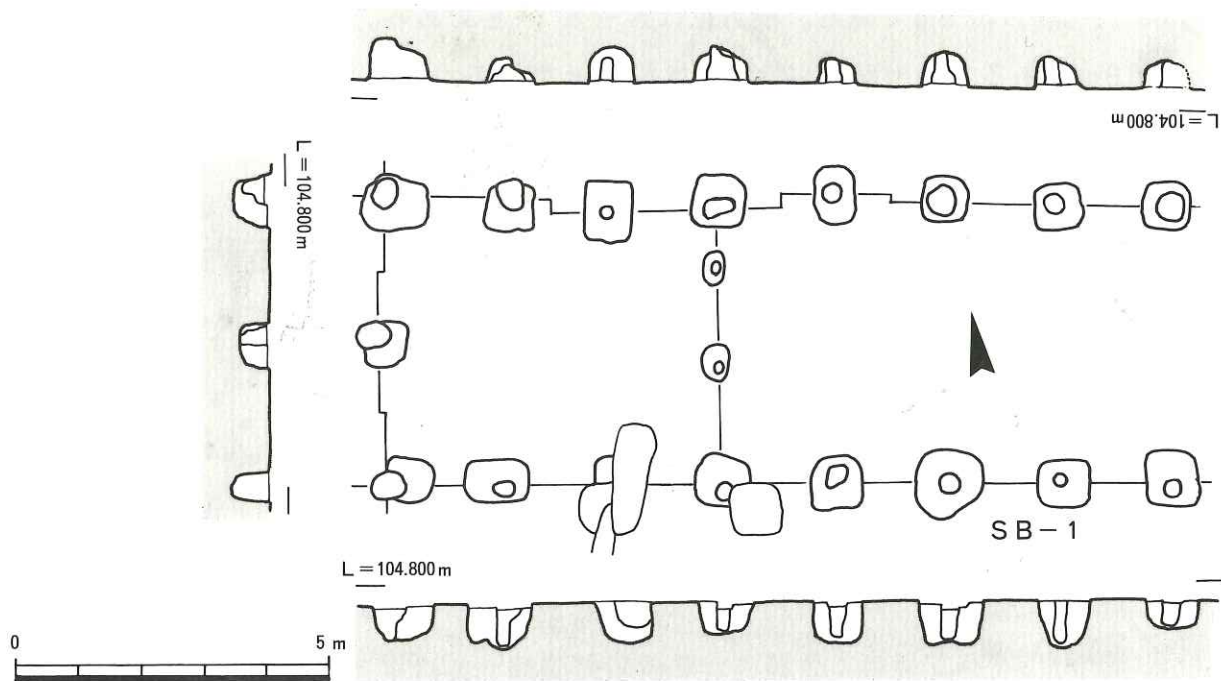


图5 SB-1~3平面图·断面图

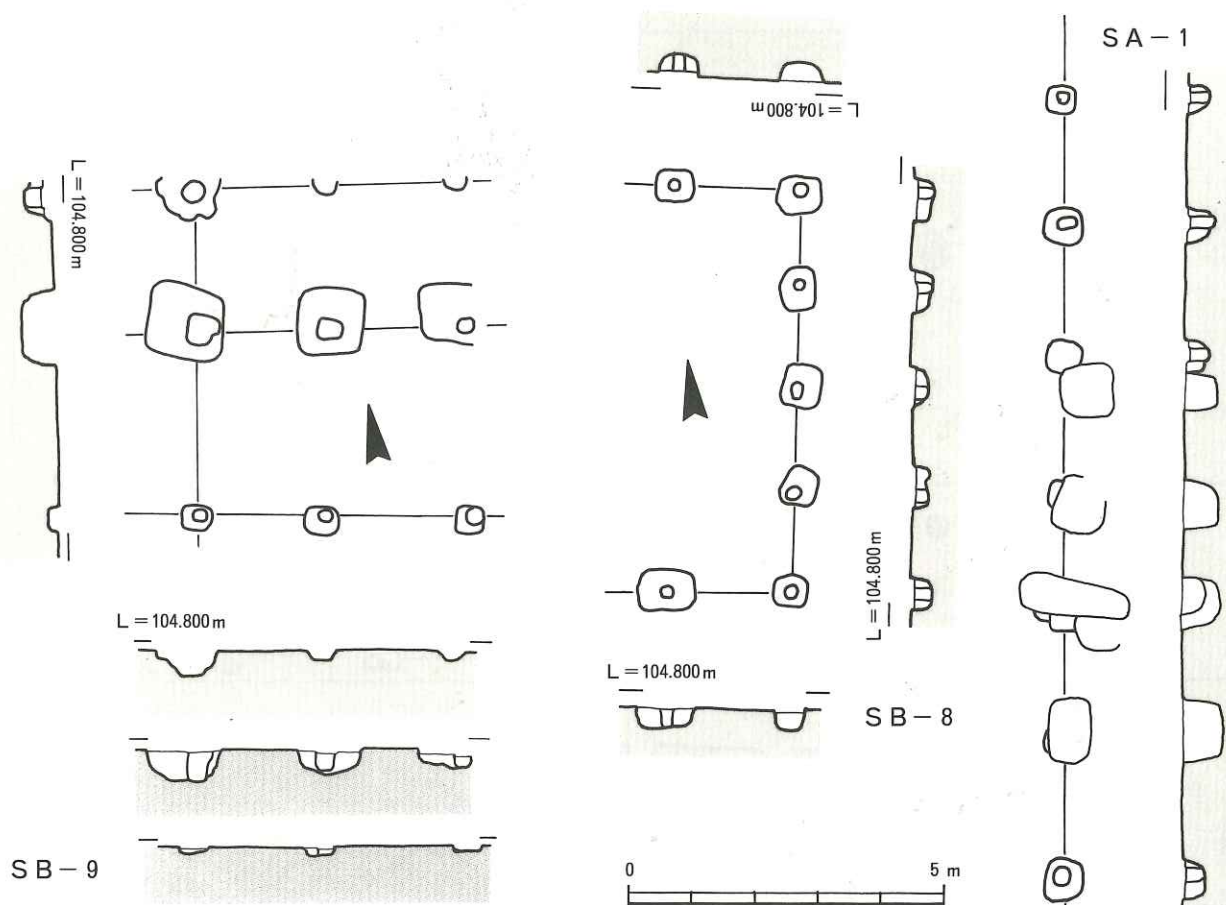


図6 SB-8・9、SA-1平面図・断面図

SB-9 調査区の北東隅で検出された桁行2間以上の建物で、南面底および束柱をもつ。調査区外に広がるため、規模は不明である。柱間距離は梁行で2.1m、底の出は3.0mである。身舎の柱掘り方は1辺約1.2mの隅丸方形で、深さは0.3~0.5m、柱痕の直径は0.3~0.4mを測る。底列の柱掘り方は隅丸方形で1辺0.5m、検出面からの深さは約0.1m程度である。棟方位は $N-10^{\circ}-E$ である。束柱は1辺約0.4m、深さ0.2mを測る。

SB-4 両面底付の掘立柱建物である。底部分を含めた規模は、6間×4間である。棟方位は $N-17^{\circ}-E$ である。柱穴は楕円形で、検出面からの深さは0.3~1.2mとばらつきがある。SB-4の北側および東側に土器が集中する箇所がある。

SB-5 4間×4間の総柱建物である。棟方位は $N-14^{\circ}-E$ である。柱穴は不整円形で、直径30cm程度である。

SB-6 調査区西隅で検出された、3間×2間以上の建物である。南東側には束柱がみられず、土間となっていたと考えられる。棟方位

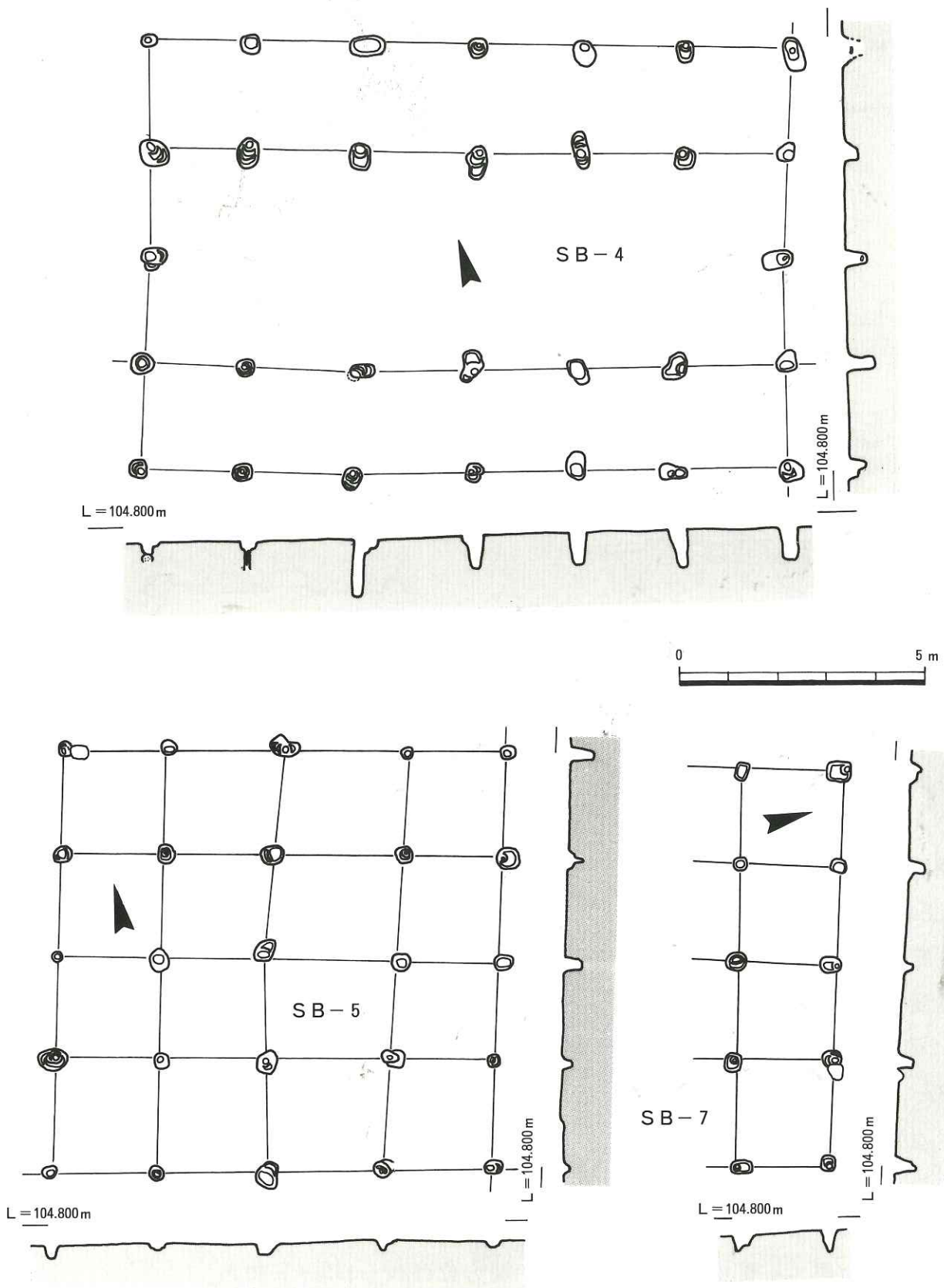


图7 SB-4·5·7平面图·断面图

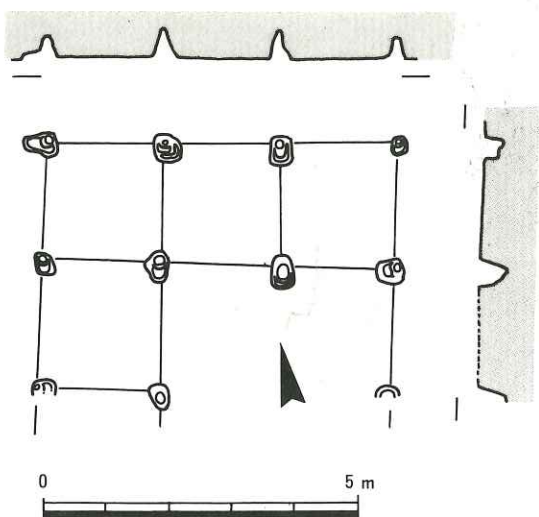


図8 SB-6 平面図・断面図

表2 建物方位一覧表

方 位	対応する建物
N-7.5~8°-E	SA-1, SB-3, SB-8
N-10°-E	SB-1, SB-2, SB-9
N-13°-E	SB-6
N-14°-E	SB-5
N-17°-E	SB-4, 7

表3 溝分類表

	方位	土色	形状	時期
A類	N-49°-W	黄灰色粘質土、暗褐色土ブロック	不整形で浅い溝	南北地割形成以前
B類	N-0°	黄褐色灰色土、おちこみ埋土に類似	幅30cm、深さ10cm程度	古 代
C類	N-14°-E	黄褐色灰色土、おちこみ埋土に類似	幅40cm、深さ10cm程度	古 代
D類	N-14°-E	黄灰色粘質土	幅20cm、深さ5cm程度	古 代 (おちこみより新しい)
E類	E-15°-S	灰褐色土など	幅40cm、深さ10~20cm	中 世

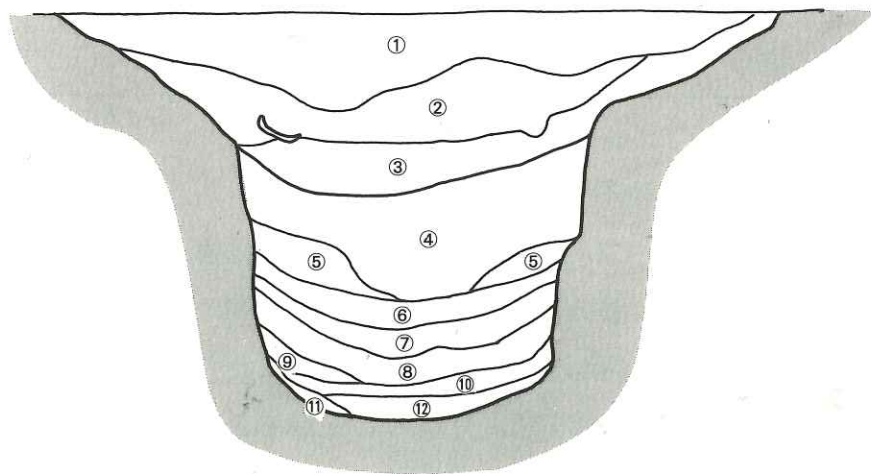
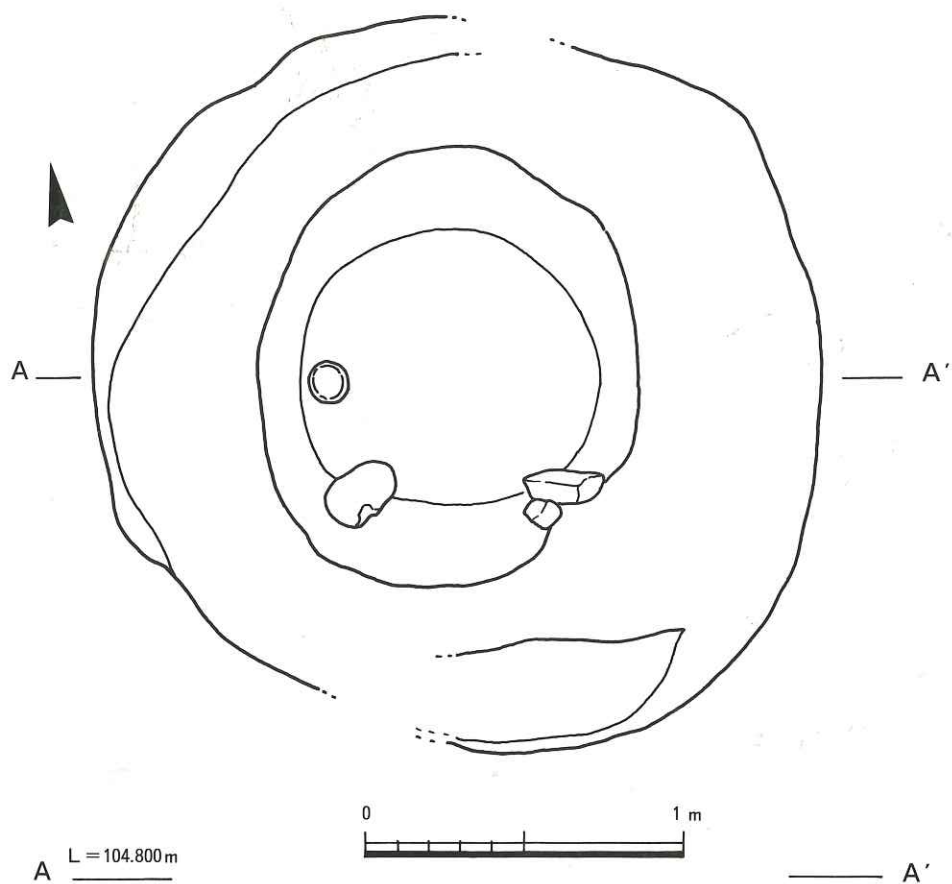
はN-13°-Eである。柱穴は不整方形を呈する。

SB-7 SB-6と重複している4間×2間以上の総柱構造をてる掘立柱建物である。棟方位はN-17°-Eである。柱穴は隅丸方形で、1辺約0.3m程度である。

SD(溝) 調査区全体から小溝がみついている。これらは方位、埋土の状況、切り合い関係などの点で、表3のように5類に分けることができる。

おちこみ 調査区南端においては、調査区外に向かってゆるやかに地山がおちこんでいる状況がみられる。おちこみの肩部は小溝と重っていることもあって、直線的にはならない。検出面からは最大で約25cmの深さである。埋土は上層が暗灰茶褐色粘質土で土器が多く、下層は茶黄灰色粘質微砂質土である。小溝C類は、おちこみと同時期の可能性がある。D・E類はおちこみが埋没した後に掘削されたものである。

SE-8 調査区西側で検出された井戸である。平面プランは円形で、井戸枠はもたない。上層では褐味明灰色土がレンズ状に堆積している。下層は直に掘り込まれている状況が残



- | | |
|------------------------|---------------------|
| ① 褐味明灰色土、暗茶色土ブロック含む | ⑦ 褐味青灰色粘質土 |
| ② 明灰色土、暗茶色土ブロック含む | ⑧ 暗灰褐色粘質土 |
| ③ 褐味明灰色粘質土 | ⑨ 暗褐灰色粘質土 |
| ④ 灰茶褐色粘質土、黄味灰白色土ブロック含む | ⑩ 褐味暗青灰色粘質土 |
| ⑤ 灰褐色粘質土、灰白色土及び黒褐色土含む | ⑪ 暗灰色粘質土、砂および黒褐色土含む |
| ⑥ 暗茶褐色粘質土 | ⑫ 暗灰色粘質土 |

図9 SE-8 平面図・断面図

されており、褐色もしくは暗青灰色の粘質土が堆積している。検出面での法量は直径2.3m、下部では直径1.0mで、検出面からの深さは1.3mである。SA-1の柱穴に切られている。上層から須恵器杯身・蓋・竈、および馬の歯が出土している。また、数個の礫が出土しているが、中に縄文時代のものと考えられる凹石が混入している。

SK-20 調査区の中央部で検出された土坑である。平面の形状は、南北方向に長い楕円形である。大きさは長辺が1.65m、短辺が0.55mである。北側はまっすぐに掘り込まれ、南側は緩やかにおち込んでいる。埋土は上層が灰褐色土、下層が暗茶褐色粘質土で、検出面からの深さは最大で0.4mである。黒色土器が出土している。SA-1、SB-1・2の柱穴に先行する。

SK-234 調査区の中央部で検出された土坑である。平面の形状は半円形を呈し、直径は1.3mである。埋土は上層が褐味黄灰色粘質微砂質土、下層は黄褐灰色粘質微砂質土で、両層間に薄く灰が堆積している状況がみとめられた。検出面からの深さは0.25mを測る。上層と下層の間から、須恵器鉢が出土した。

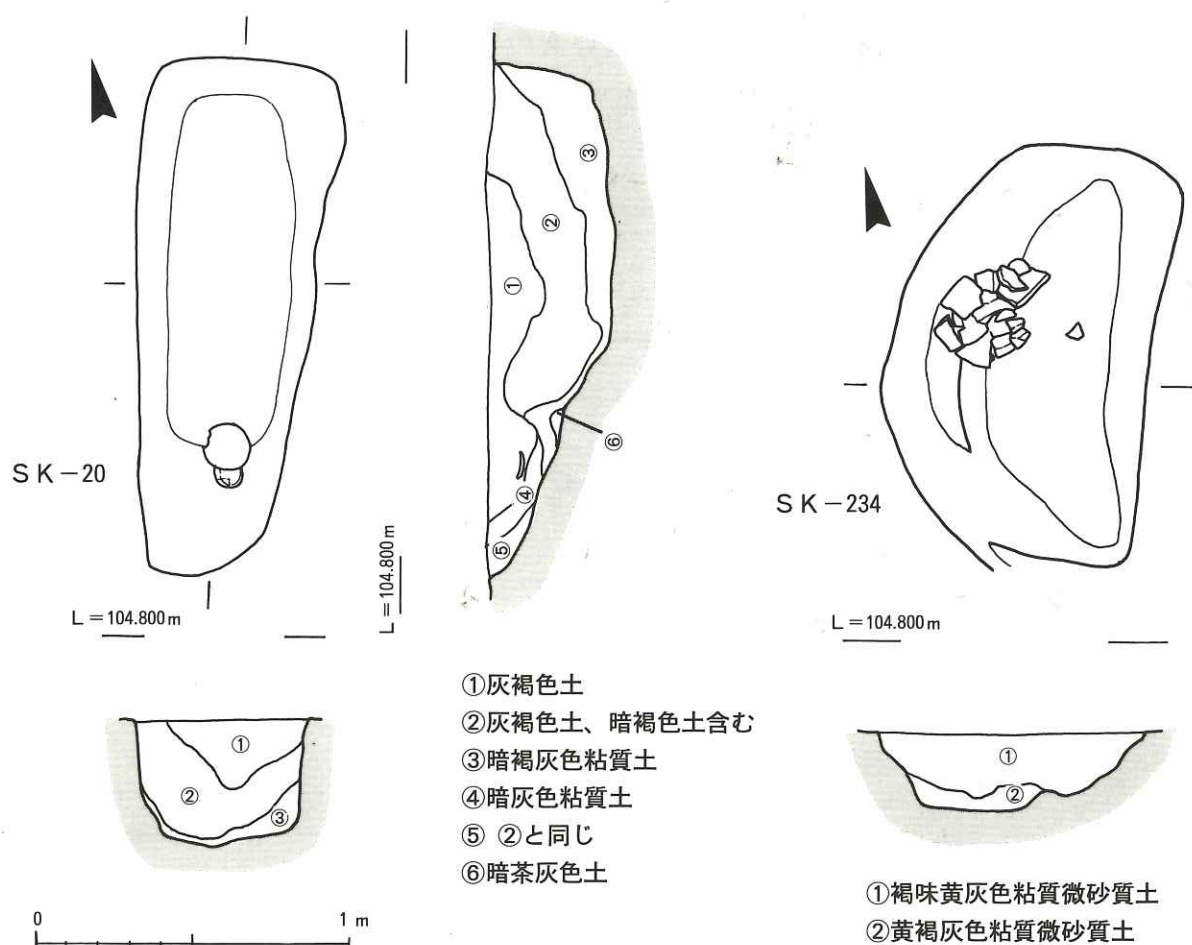


図10 SK-20、SK-234 平面図・断面図

出土遺物

掘立柱建物出土遺物 1～4はいずれもSB-2から出土した須恵器である。1～4とも平坦な天井部にツマミをつけるものである。1のツマミは中央部分が突出するもので、2は径が大きく扁平なものである。5～10は須恵器杯身である。5～7は高台がつかないタイプである。体部は外反して直に立ち上げる。8は体部が外反する器高が高い杯である。9、10は高台を付ける杯身である。9は断面逆台形の高台をもち、10の高台は内側に段をもつものである。11は土師器杯身で、内面端部に沈線をめぐらせ、内面には斜放射状暗文を施す。12は土師器皿で、平坦な底部から外弯する体部を外上方にたちあげ、端部をまるくおさめる。内面はヨコハケのあと、斜放射状暗文を施し、体部外面はヘラミガキによる。13は土師器甕の口縁部である。1～9、11は平城Ⅳ・Ⅴを中心とする時期に相当する。10、12は、平城Ⅲに相当する時期にさかのぼると考えられる。

SE-8 出土遺物 14、15は須恵器杯蓋である。いずれも天井部には丸味があり、端部内面の屈曲は小さい。15はツマミが遺存しており、扁平で中央のみ突出するものである。15の口径は14.9cm、器高は3.0cmである。16～19は須恵器杯身である。16、17は高台をつけるもので内端で接地する。18、19は高台がつかないもので、18は平らな底部でをもつ。19は口径が12.4cmで、やや丸味のある底部から体部を外上方にたちあげるものである。20は須

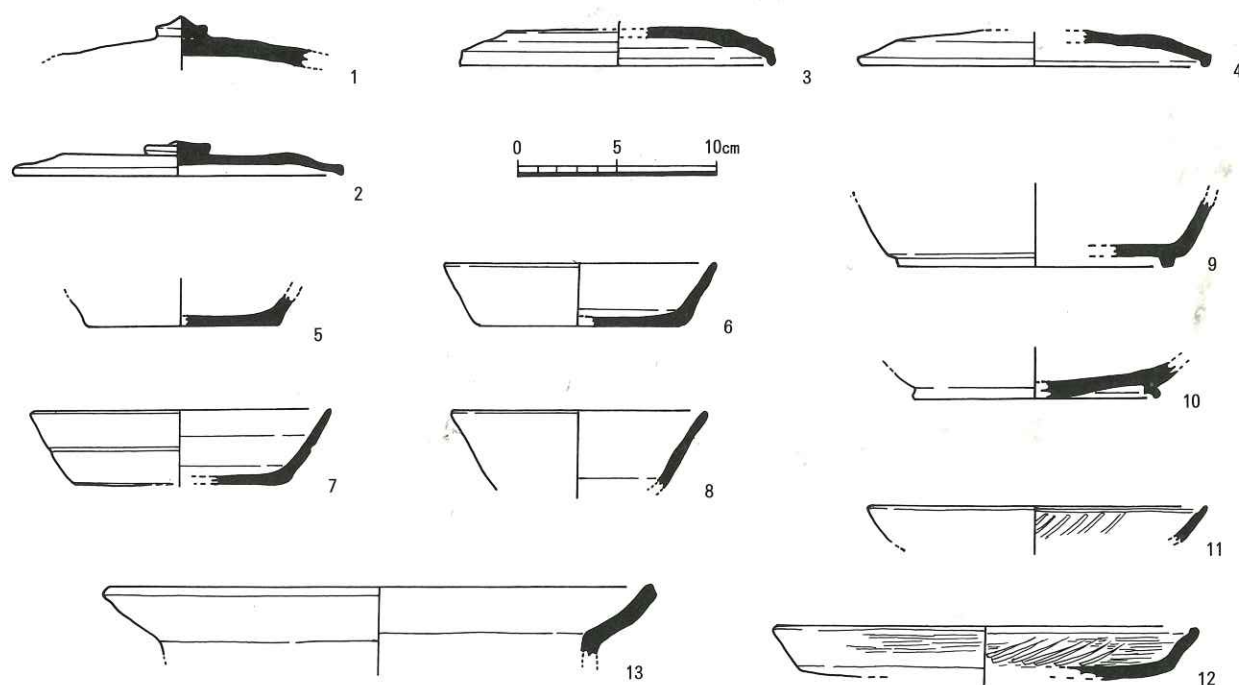


図11 掘立柱建物（古代）出土遺物

(	1～4, 7～9, 11	SB-2 出土 (3, 4 柱掘り方, 11 柱痕)
	5, 6, 13	SB-1 出土 (6 柱掘り方)
	10, 12	SB-3 出土 (10 柱掘り方, 12 柱痕)

恵器碌である。平らな底部から内弯する体部をたちあげ、肩部で屈曲して内上方にたちあげる。肩部には沈線をめぐらせ、孔を穿つ。底部には内端で接地する高台をつける。平城IV・Vに相当する時期である。

S K - 234出土遺物 21は土師器杯身である。平らな底部から体部を外上方にたちあげ、端部はまるくおさめる。内面には斜放射状暗文を施す。22、23は須恵器杯身である。高台は扁平で内端で接地する。24、25は須恵器鉢である。25はほぼ完全な形に復元できるもので、片口をもつ鉢である。底部は平坦で内弯する体部をもつ。片口付近の外面に「ノ」の字のヘラガキが認められる。平城IV、Vを中心とする時期に相当する。

南側おちこみ出土遺物 26、27は須恵器杯蓋である。天井部は平らで扁平なツマミがつく。28～33は須恵器杯身で、28、29、31は平らな底部からやや外弯する体部を外上方にたちあげるものである。30～32は低い高台がつくもので、いずれも内端で接地する。33の高台は細いもので、体部は直立して外上方にたちあげる。34は短頸壺である。肩部で明瞭に屈曲する。口径は6.4cmである。35は土師器皿である。36～39は土師器甕である。36は口径12.2cmで外面ハケ、内面ナデにより調整する。口縁部はゆるやかに開き、端部は内面に折り返している。37～39は「く」の字に屈曲する口縁部をもつもので、37の内面はハケにより調

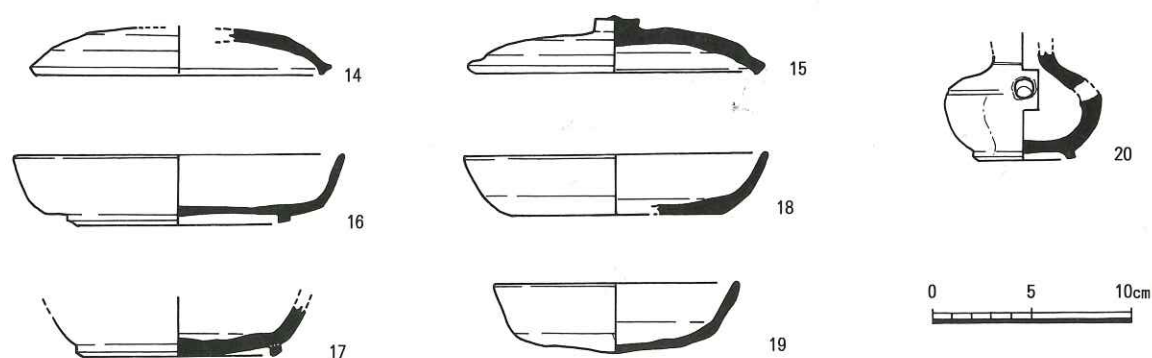


図12 SE - 8 出土遺物

(14 検出面下115cm, 15 ①層, 16 検出面下50cm, 19 ②層)

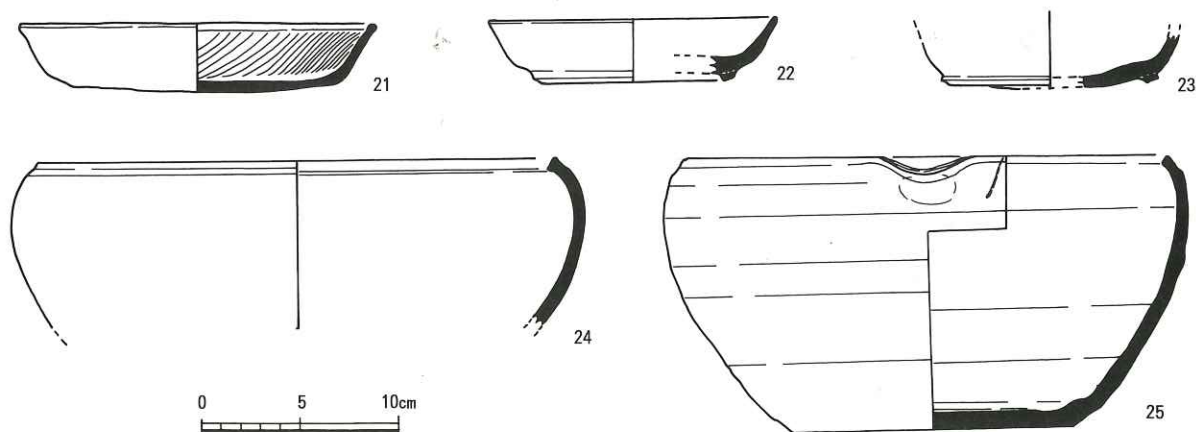


図13 S K - 234出土遺物

整している。38の外面もハケ調整である。

掘立柱建物（SB-4～7）出土遺物 40～52は土師器皿である。40は「て」の字状口縁を有するタイプである。41、42、44は底部が丸味を帯びる皿で、口径が8.2～8.4cmのものである。42～48、51は単純口縁1段ナデ手法の皿で、口径が9.0～10.6cmのものである。42～47は、底部が丸味を帯びるもの、48は平らな底部から、口縁部を外上方にむけてたちあげるものである。53は脚台付の皿で、皿部が丸味を帯びる。54～56は単純口縁1段ナデ手法の大皿で、54、55の底部は丸味を帯び、56の底部は平らである。57は黒色土器碗である。58、59は灰釉陶器碗である。折戸53号窯式（10世紀後半）に相当する。

土坑・溝出土遺物 60～67は単純口縁1段ナデ技法の皿で、60～63は小皿である。61は平らな底部から口縁部を外上方に立ちあげるもの、62、63は底部が丸味を帯びるものである。64～67は大皿で、66、67は底部に丸味があり、器高が高いものである。68～70は黒色土器碗で、内黒焼成である。68、70は内面端部に沈線をめぐらす。70は断面逆三角形の高台を貼りつける。

土器群および包含層出土遺物 71～80は土師器小皿である。73、74、77、78は単純口縁1段ナデ手法のもので、丸味のある底部をもつ。口径は9.4～10.0cmと比較的大きく、器高は1.9～2.0cmである。71、75、76は上述の皿とほぼ同様の形態であるが口径が8.7～9.0cmとやや小さい。72は口縁部のナデが強く、口縁部の内面に段がつくものである。底部は丸味を

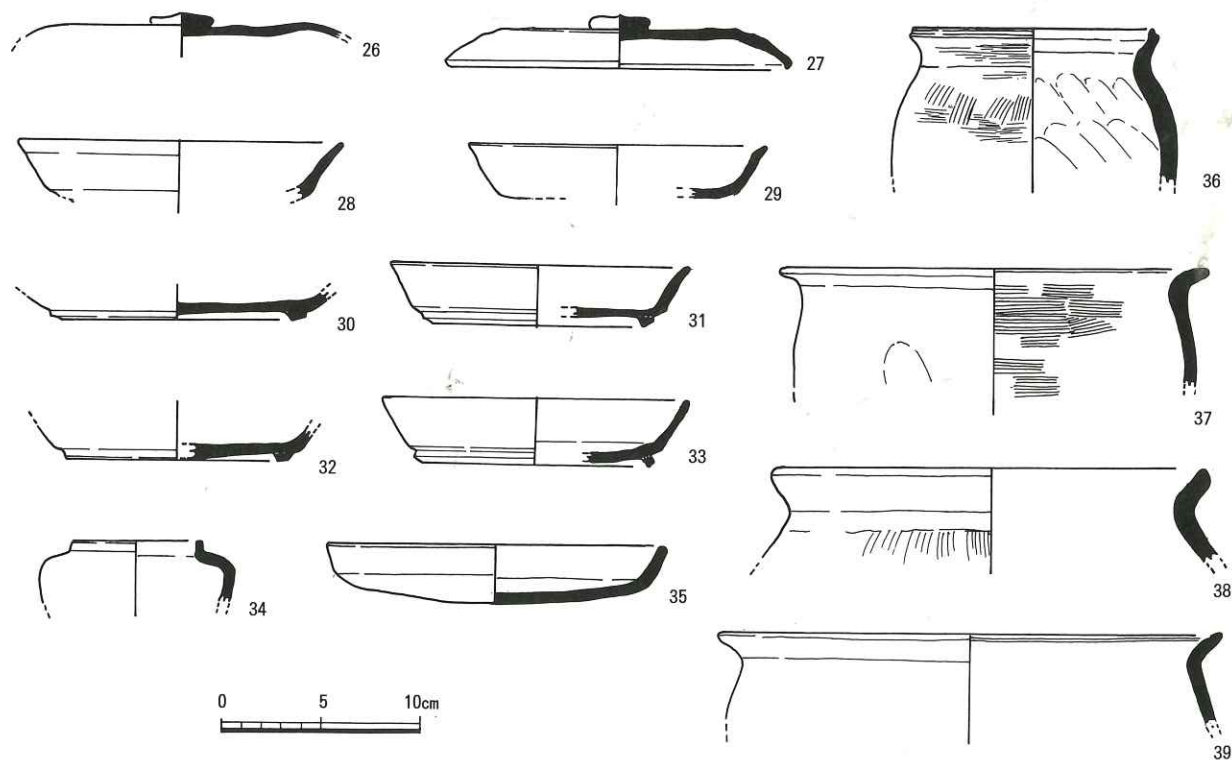


図14 南側おちこみ出土遺物

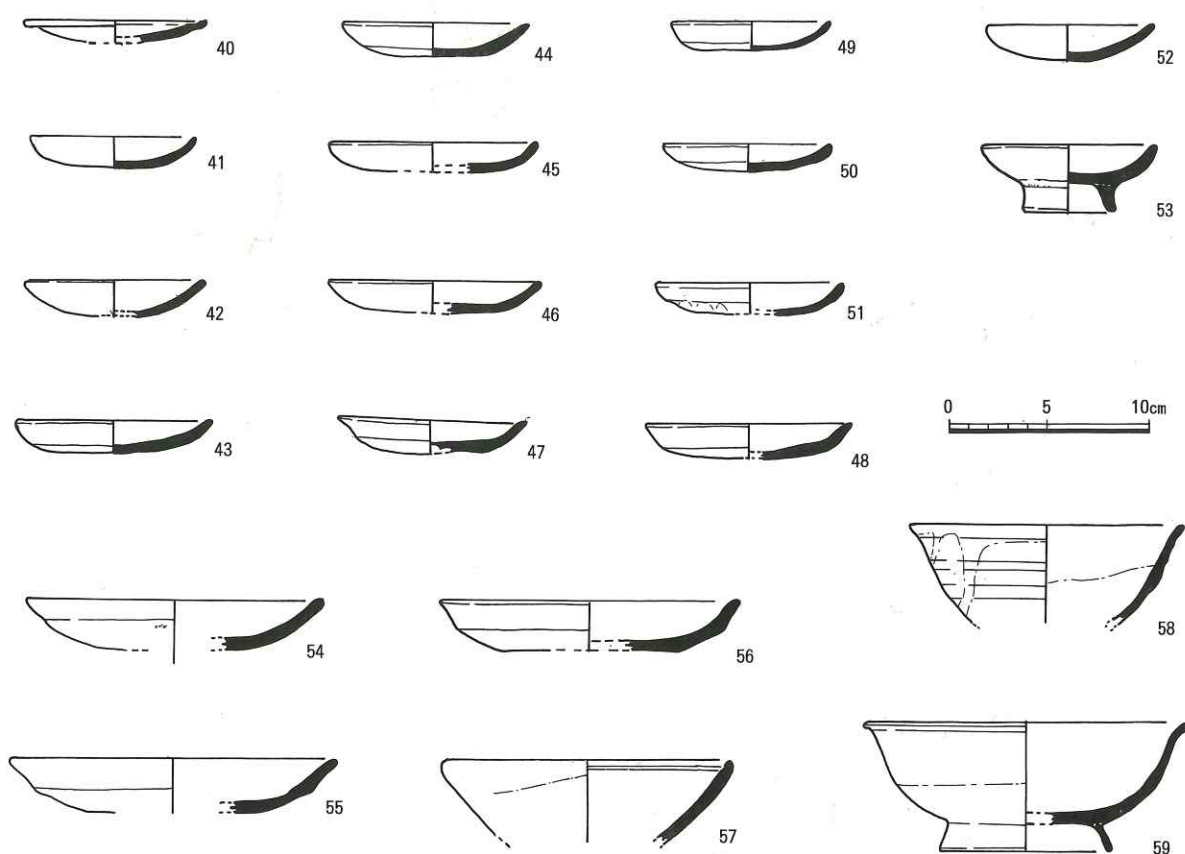


图15 掘立柱建物 (SB-4~7) 出土遺物

(41~48, 53~59 SB-4 40, 58 SB-5)
 (49~51 SB-6 52 SB-7)

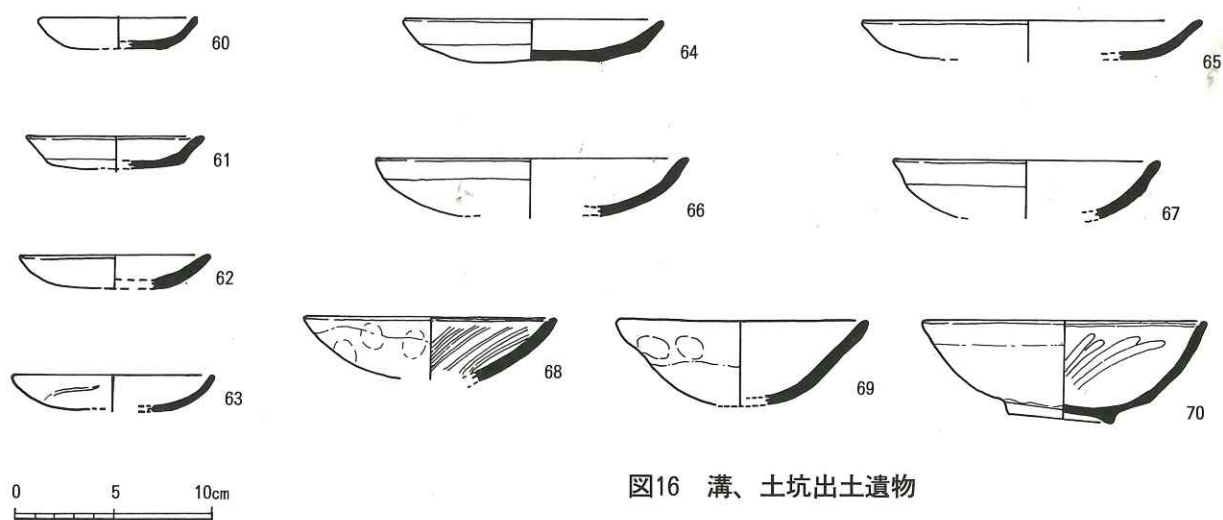


图16 溝、土坑出土遺物

(60 SD-27 61, 62, 64~67 SK-1)
 (63, 70 SK-20 68, 69 SD-177)

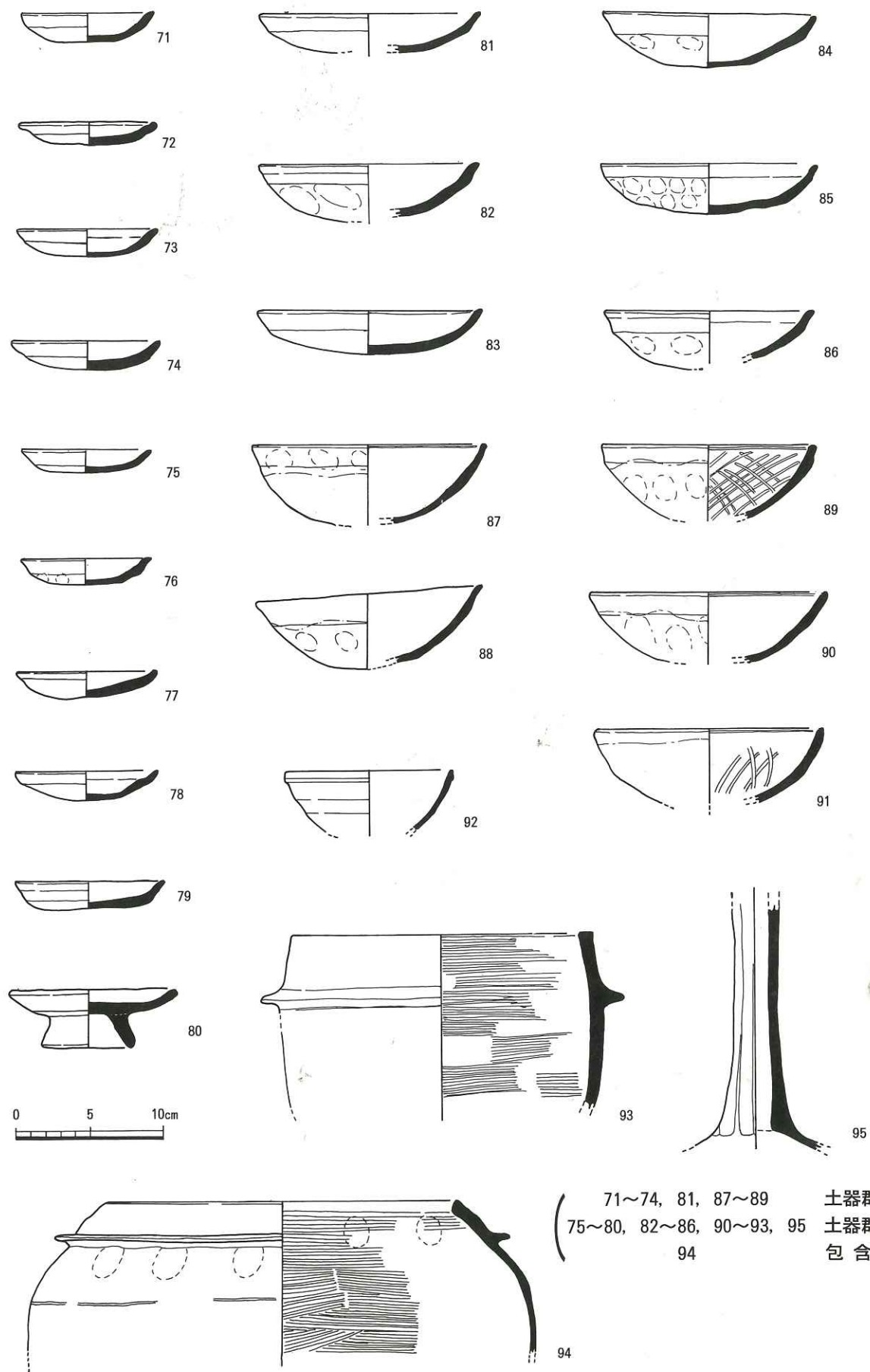


图17 包含層出土遺物

帯びる。79は、平らな底部で、外上方にのびる口縁部に2段のナデを施すものである。80は脚台付の皿である。81～86は土師器大皿である。単純口縁1段ナデ手法による。82、84～86は口径が14.2～14.9cm、器高が3.4～3.9cmの深い皿である。87～90は黒色土器碗である。口径は14.4～16.1cm、器高は4.9～5.5cmで、内面にはラセン状の暗文を施す。森氏編年Ⅱ－5段階（13世紀前葉）に相当する時期である。92は口縁部が玉縁状を呈する白磁碗である。93、94は土師質の羽釜である。93は体部が直立し、94は体部が内弯している。95は土師器高杯脚部である。

4. 小 結

手原遺跡では、これまでの調査から以下の時期区分を設けることができる。

- I 期（4 世紀）掘立柱建物による集落
- II 期（6 ～ 7 世紀）北を約45度振る溝が広範囲に出現
- III 期（7 世紀後半～8 世紀前半）瓦が集中する時期
- IV 期（8 世紀後半～10世紀代）企画性の高い倉庫群
- V 期（11世紀～14世紀）溝で区画された掘立柱建物集落

今回報告した調査区で最も古い遺構はII期のもの（溝A類）である。遺物は出土していないが、手原遺跡一帯に広がる正南北地割形成以前の所産と考えられる。

IV期になると規模が大きく、企画性の高い建物群が出現する。遺構の切り合いからは、SA-1（塀）が最も早く出現する（IV-a期）。塀との位置関係、および主軸の方向から、塀の南北に2棟の建物（SB-3，8）が付随する。IV-b期になると塀がとり払われさらに大規模な掘立柱建物（SB-1，2，9）が建てられる。建物との切り合いから、東西棟（SB-1）が南北棟（SB-2）に建て替えられているといえる。SB-9は部分的な検出ながら最も大きい柱穴規模をもち南面庇をつけ、束柱を有する建物である。いずれの建物との切り合いはないが、SB-2とは近接しすぎていること、SB-

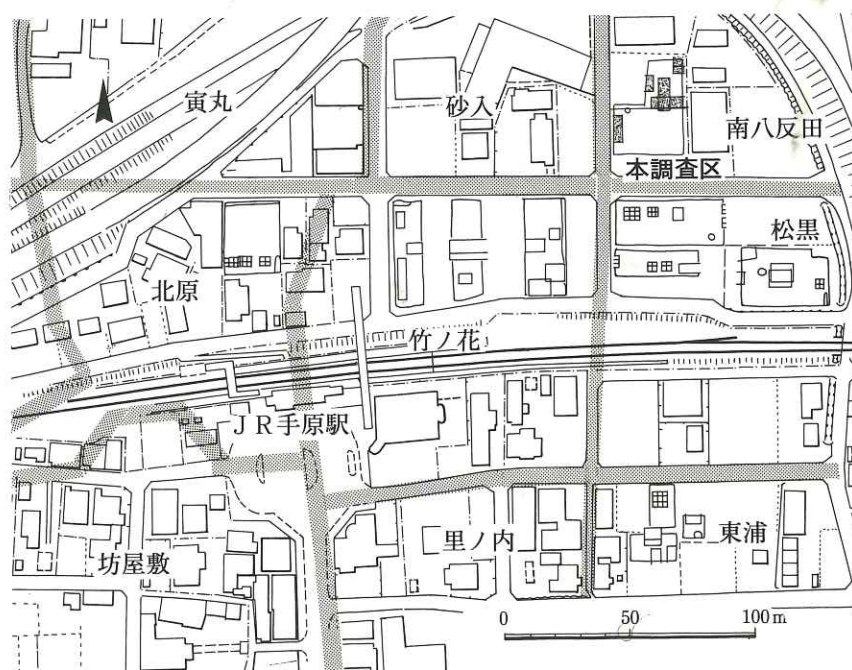


図18 手原遺跡周辺図

1の柱と筋が揃うことからSB-1と並列関係にあった可能性が高い。後出するSB-2の北側には、不整形の小柱穴が多くあり、SB-2の北側には生垣状の区画施設があったものと考えられる。また、この時期には調査区南辺におちこみがみられる。建物から出土した遺物から、IV-a期は8世紀中葉、IV-b期は8世紀後半に比定できよう。

IV期のおわりになると、すでに埋没したおちこみと重って、SB-5が建てられる。これは10世紀代の所産と考えられる。

13世紀を中心とする時期になると、調査区南半部で掘立柱建物が建てられる(V期)。軸方位の類似から、SB-4およびSB-7が同時期のものと考えられ(V-a期)、最終的に出現する溝(SD-27)に区画されるSB-6が、後出する時期のものであると考えられる(V-b期)。

今回の調査で明らかになった遺構のうち、IV-a期の塀は東西方向に30m以上にわたって延びると考えられるもので、建物配置の企画性の高さや規模の広さを伺うことができる。県内における同時期の例としては、栗東町岡遺跡(栗太郡衙推定地)D区の区画施設、今津町日置前遺跡等の官衙遺跡で類例がみられる。とくに岡遺跡では郡庁・正倉・雑舎に推定されている建物群が溝により区画されているのに対し、D区のみが塀で囲まれていることから、特別な場であると考えられる。手原遺跡例は部分的な検出であり、その性格について判断することは、現状では難しい。

これにつづく時期のIV-b期に出現する建物は、一般集落ではみられない規模のものである。とくに北端で検出されたSB-9は、手原遺跡内において最大級の建物になる可能性があり、中心的な施設とみられる竹ノ花地区の中心建物に匹敵する。また、SB-1, 2も桁行が長い点で特異なものである。手原遺跡は近年の調査でIV期の建物群が多くみつき、総柱建物群の存在や企画性の高さ、規模の大きさから、官衙的な性格が考えられる。今回調査されたIV期の遺構もその一画を形成しているものと考えられ、このうちIV-b期の建物群は、竹ノ花地区のように広場的なスペースをもたず、建物を並列させている点において、政庁的なものではないと考えられる。その具体的な性格は、今後の周辺地区の調査をまって再検討する必要がある。

参考文献

- 森 隆「滋賀県における古代末・中世土器」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ 1987
葛原秀雄『今津町文化財調査報告書』第5集 今津町教育委員会 1986
雨森智美「手原遺跡と古代の地方官衙」『近江歴史・考古論集』 1996

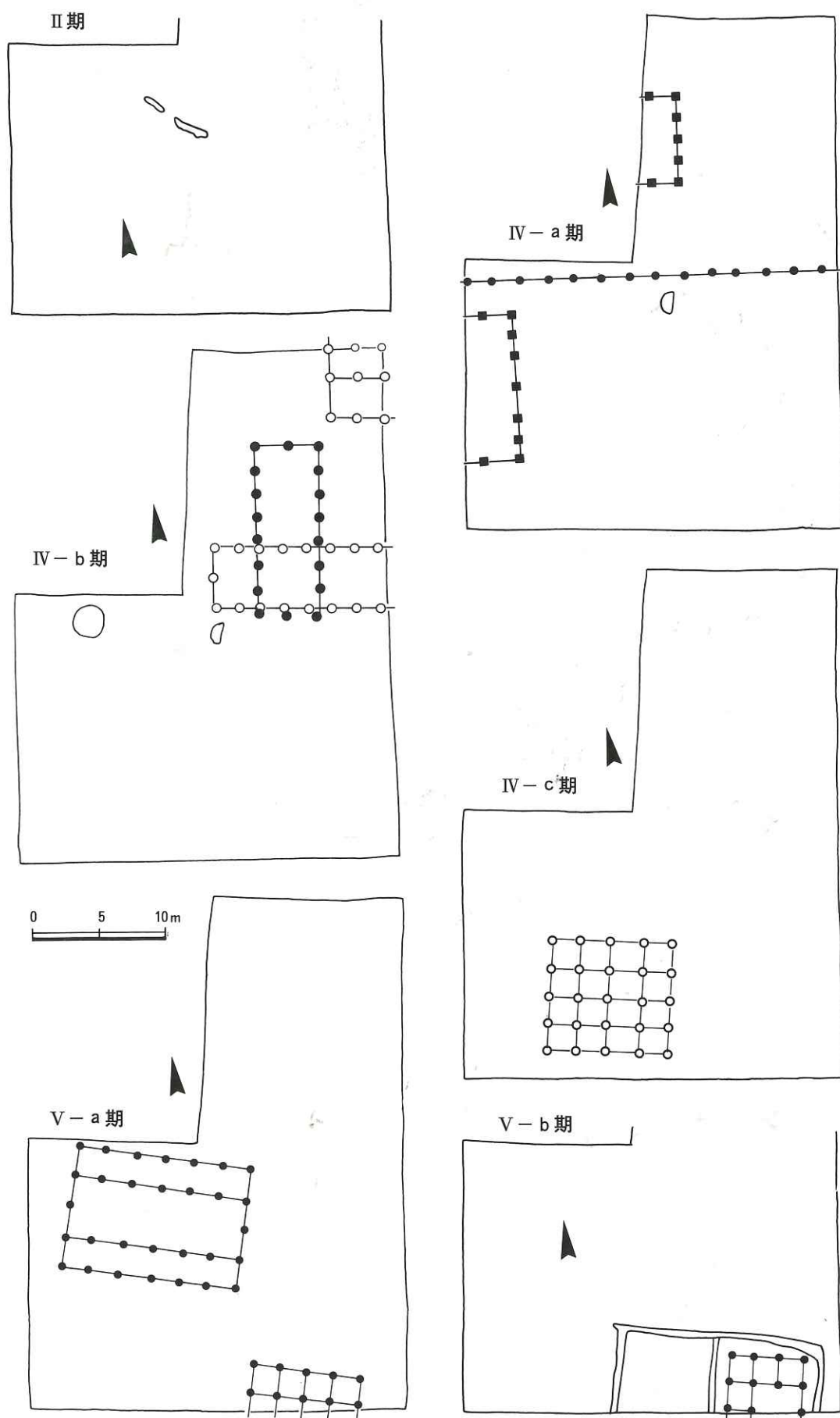
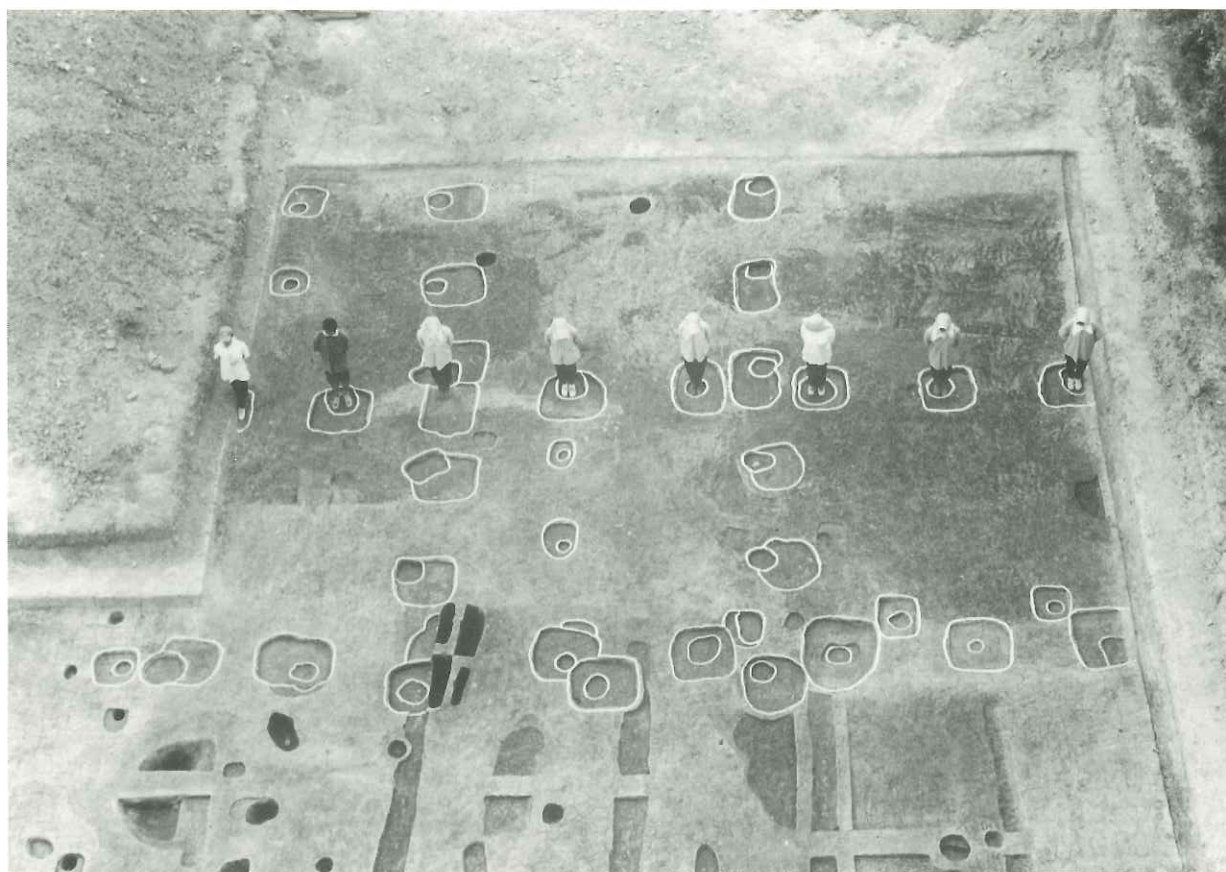


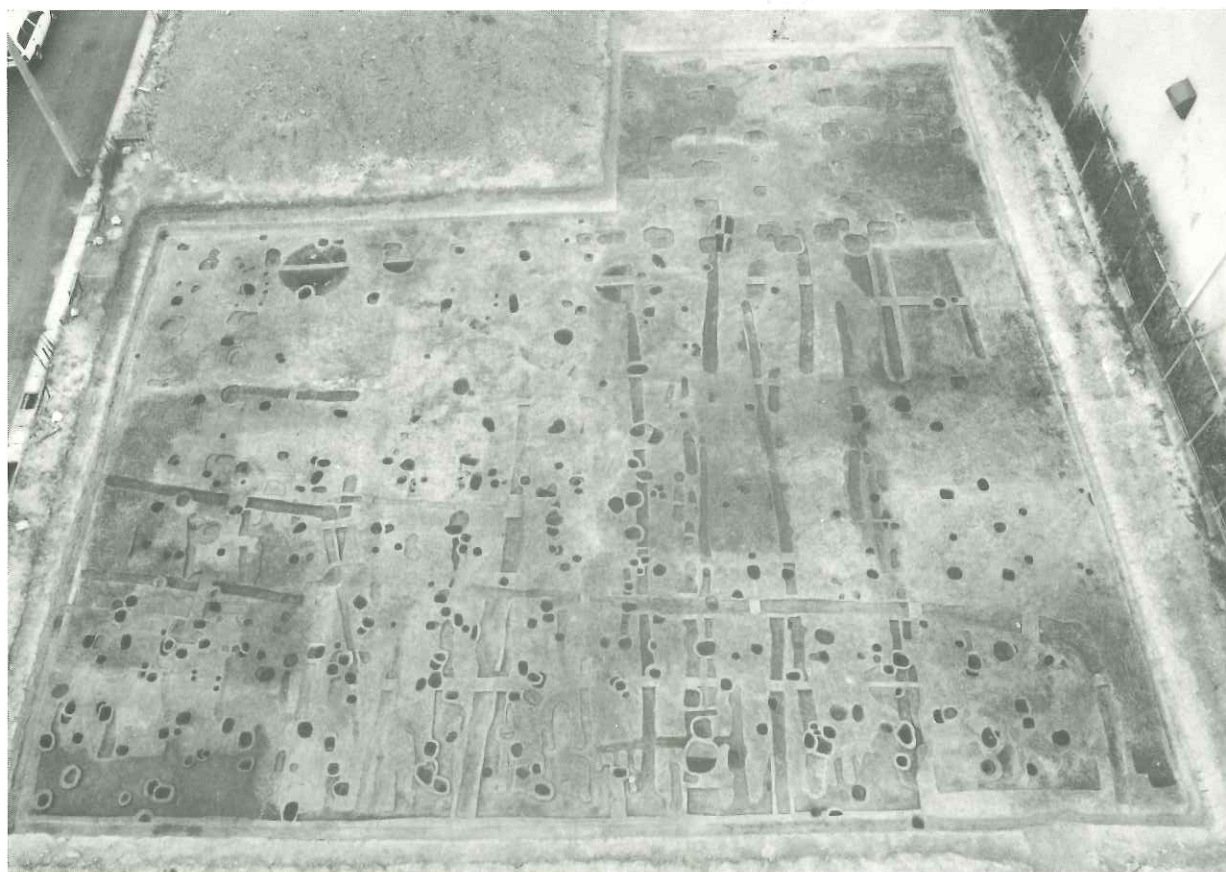
图19 遺構變遷圖



SB-2



SB-1, 2



調査区全景



SB-9



SB-1、2 (北よりみる)



SB-8 柱穴



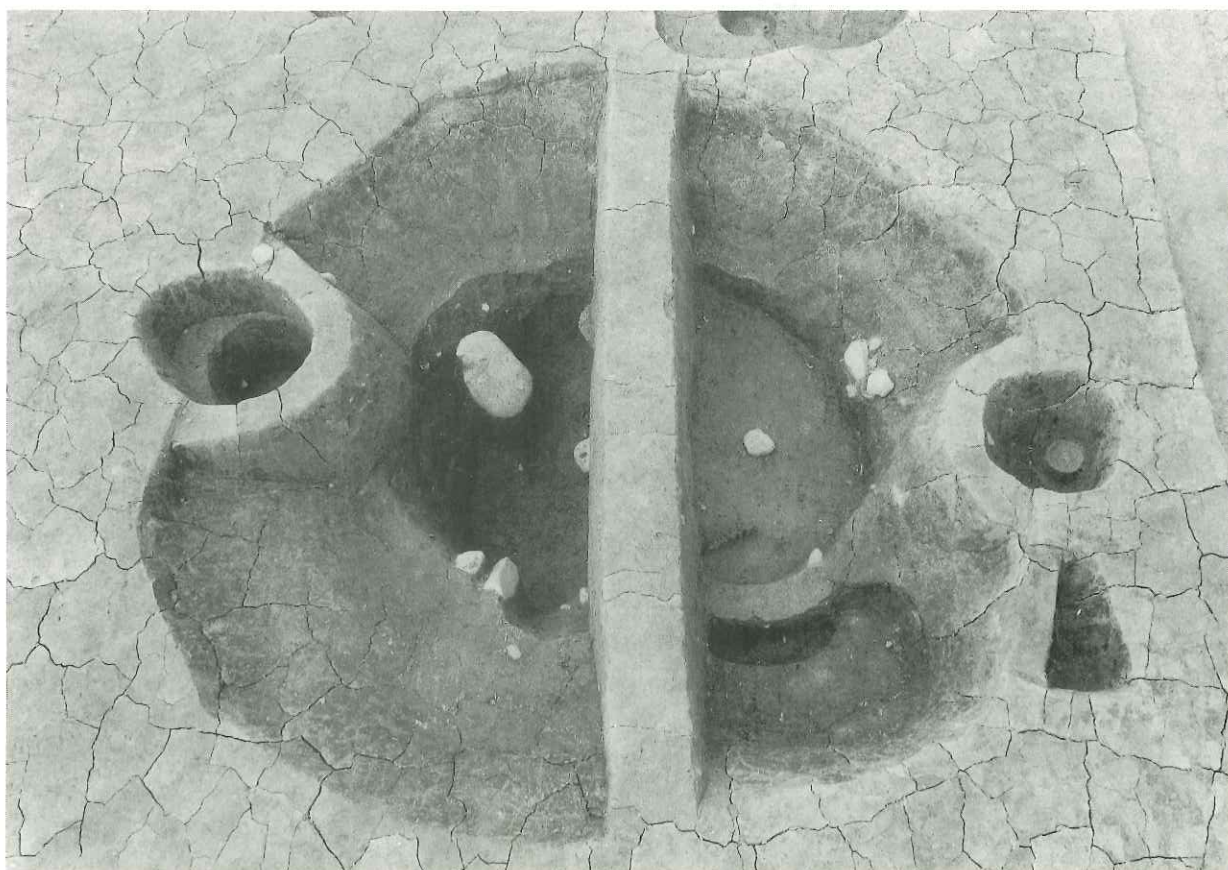
SE-8 馬齒出土状況



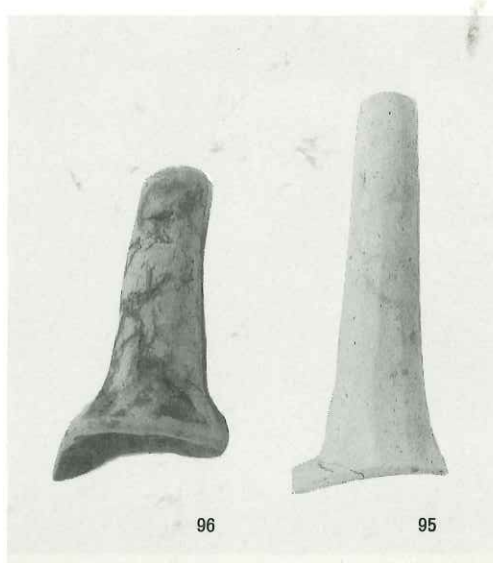
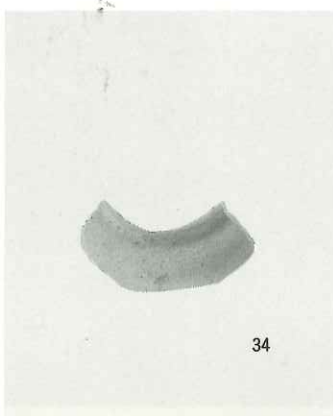
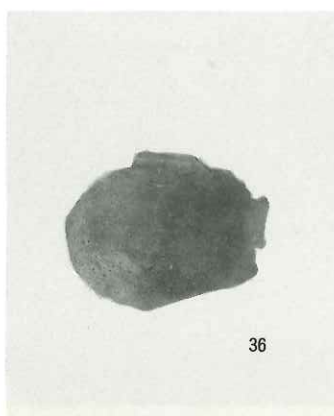
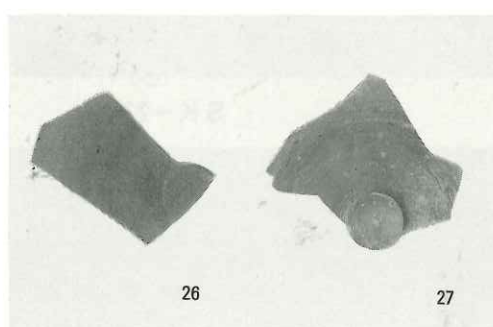
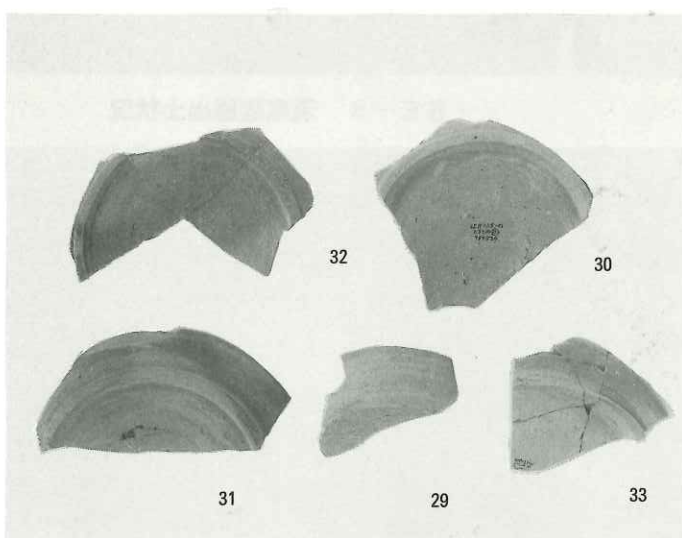
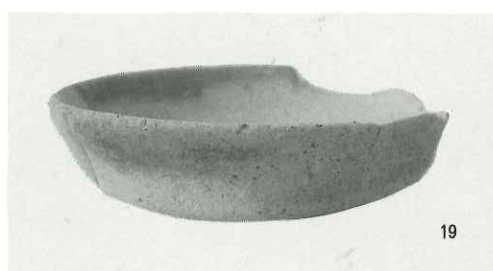
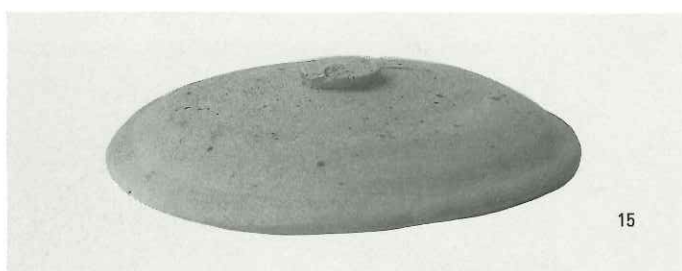
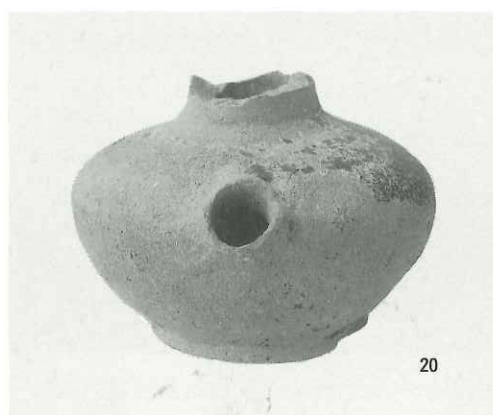
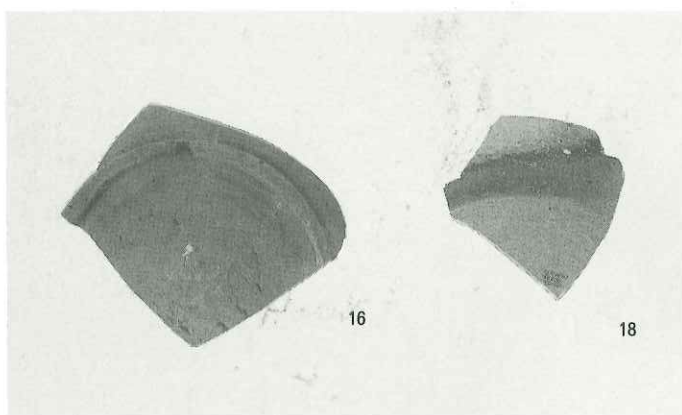
SK-234

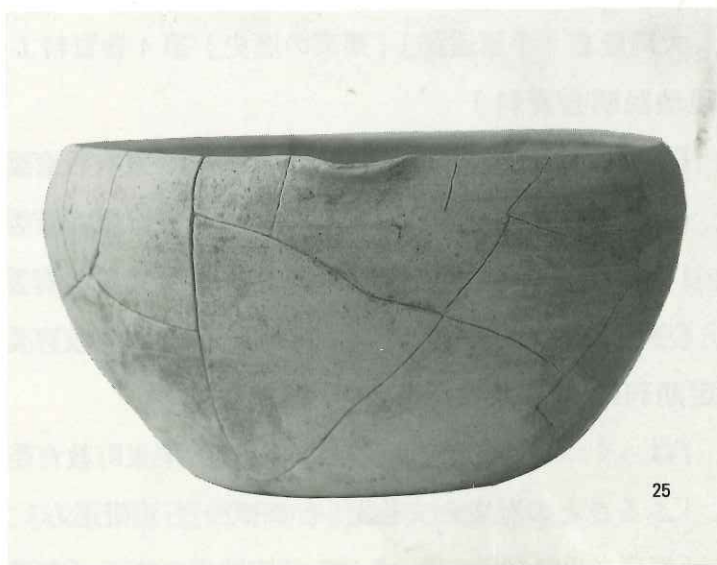
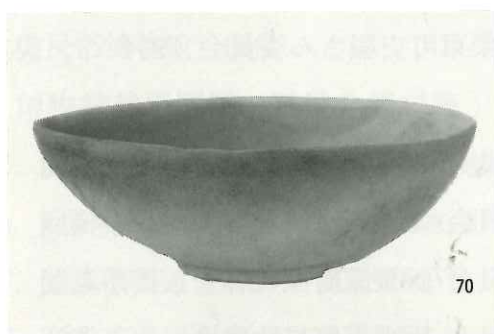
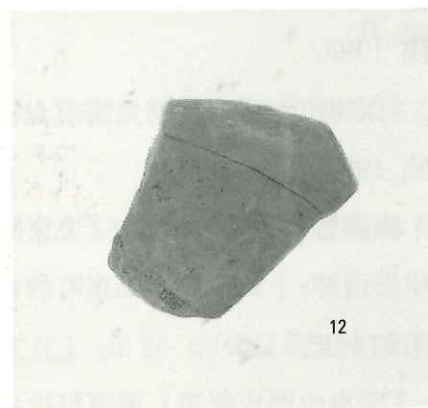
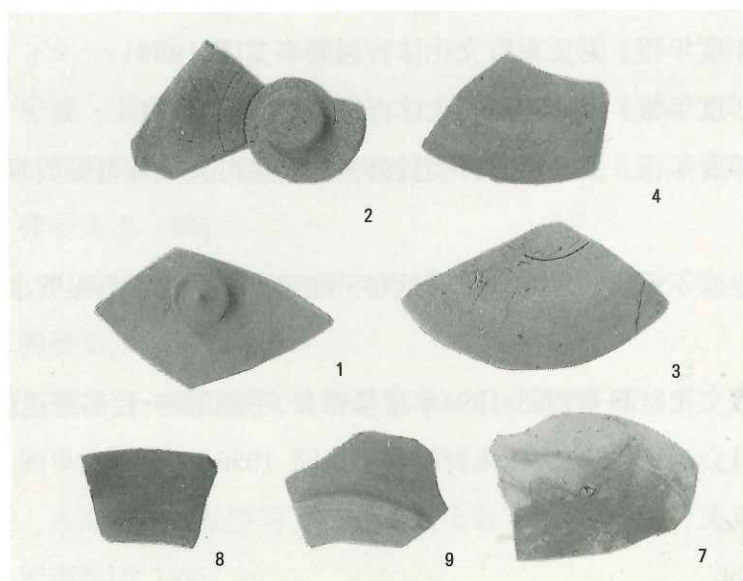
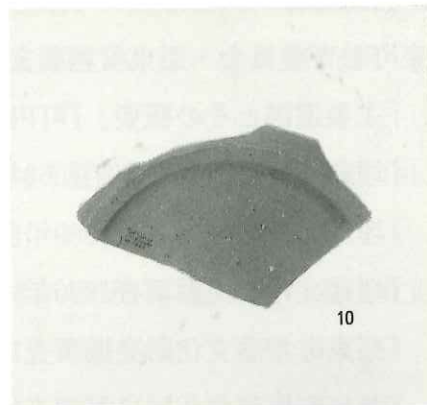
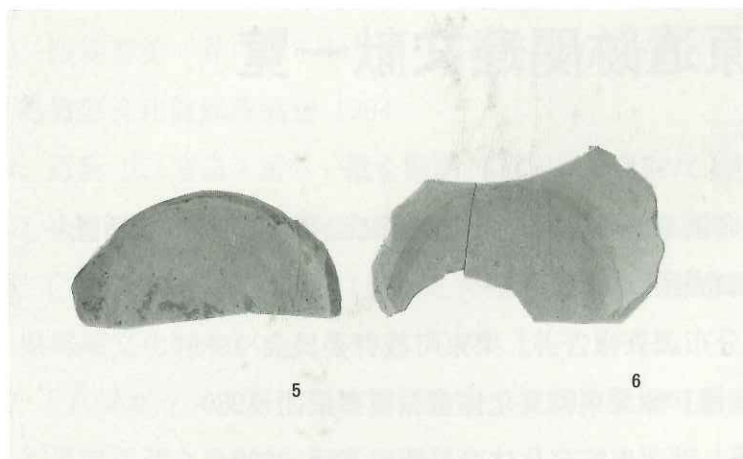


SE-8 須恵器跡出土状況



SE-8 掘削状況





付章 手原遺跡関連文献一覧

〔報告書・年報・概報〕

1. 大橋信弥・大崎隆志 『手原遺跡発掘調査報告書―栗東町商工会館建設に伴う調査―』 栗東町教育委員会・栗東町埋蔵文化財調査団 1981
2. 「主要遺跡とその概要」『町内遺跡分布調査報告書』 栗東町教育委員会 1989
3. 『埋蔵文化財発掘調査昭和63年度年報』(助)栗東町文化体育振興事業団 1989
4. 『埋蔵文化財発掘調査1989年度年報』(助)栗東町文化体育振興事業団 1990
5. 『埋蔵文化財発掘調査1990年度年報』(助)栗東町文化体育振興事業団 1991
6. 『栗東町埋蔵文化財発掘調査1992年度年報』(助)栗東町文化体育振興事業団 1993
7. 『栗東町埋蔵文化財発掘調査1993年度年報』(助)栗東町文化体育振興事業団 1994
8. 『栗東町埋蔵文化財発掘調査1994年度年報』 栗東町教育委員会・(助)栗東町文化体育振興事業団 1995
9. 『栗東町埋蔵文化財発掘調査1995年度年報』 栗東町教育委員会・(助)栗東町文化体育振興事業団 1996
10. 雨森智美「手原遺跡」『栗東町埋蔵文化財調査1993・1994年度年報Ⅱ 手原遺跡・辻高野遺跡・伊勢遺跡・下鉤遺跡』 栗東町教育委員会・(助)栗東町文化体育振興事業団 1996

〔市町村史〕

11. 『栗東の歴史年表』 栗東町役場 1986
12. 『栗東の歴史』第1巻 栗東町史編さん委員会 1988
13. 大崎隆志「手原遺跡」『栗東の歴史』第4巻資料Ⅰ 栗東町史編さん委員会 1994

〔現地説明会資料〕

14. 『手原遺跡現地説明会資料』1988.2.11 栗東町教育委員会・(助)栗東町文化体育振興事業団
15. 『手原遺跡現地説明会資料』1992.8.8 栗東町教育委員会・(助)栗東町文化体育振興事業団
16. 『手原遺跡現地説明会資料』1993.7.24 栗東町教育委員会・(助)栗東町文化体育振興事業団
17. 『手原遺跡現地説明会資料』1995.9.9 栗東町教育委員会・(助)栗東町文化体育振興事業団

〔定期刊行物〕

18. 『はっくつ'95 栗東町話題の発掘調査』 栗東町教育委員会・(助)栗東町文化体育振興事業団 1996
19. 「ふるさとの歴史と文化財(その80)・石袴帯巡方」『広報りっとう』8月15日号 1982
20. 「埋蔵文化財発掘レポート127 平安時代の井戸 手原遺跡から」『広報りっとう』2月15日号 1994
21. 「埋蔵文化財発掘レポート151 古代の役所跡?―手原遺跡―」『広報りっとう』2月15日号 1996
22. 雨森智美「白鳳寺院関連の掘立柱建物か」『滋賀文化財だより』No.182 (助)滋賀県文化財保護

協会 1993

23. 雨森智美「井戸から取っ手付きの長頸壺が出土（栗東町）」『滋賀文化財だより』No.194 (財) 滋賀県文化財保護協会 1994
24. 近藤 広「官営工房の一端を確認」『滋賀県文化財だより』No.194 (財) 滋賀県文化財保護協会 1994
25. 雨森智美「郡衙級の官衙遺跡の一部か」『滋賀県文化財だより』No.218 (財) 滋賀県文化財保護協会 1996
26. 「古代地方官衙の貴重な資料を発掘・栗東町手原遺跡」『滋賀埋文ニュース』第156号 滋賀県埋蔵文化財センター 1993
27. 「官営ガラス工房に関連した建物を検出・栗東町手原遺跡」『滋賀埋文ニュース』第161号 滋賀県埋蔵文化財センター 1993
28. 「郡衙級の建物発見・栗東町手原遺跡」『滋賀埋文ニュース』第188号 滋賀県埋蔵文化財センター 1995

〔 紀要・雑誌 〕

29. 大崎隆志「埋蔵文化財調査考・手原遺跡(I)」『栗東の文化』第3号 (財) 栗東町文化体育振興事業団 1985
30. 大崎隆志「埋蔵文化財調査考・手原遺跡(II)」『栗東の文化』第4号 (財) 栗東町文化体育振興事業団 1985
31. 平井寿一「埋蔵文化財調査考・手原遺跡(III)」『栗東の文化』vol. 5 (財) 栗東町文化体育振興事業団 1985
32. 大崎隆志「航空写真で見る文化財・手原遺跡」『栗東の文化』vol.26 (財) 栗東町文化体育振興事業団 1992
33. 松村 浩・畑本陽子「栗東町出土の古代軒瓦」『栗東歴史民俗博物館紀要』第2号 栗東歴史民俗博物館 1996

〔 博物館展示図録・講演会資料等 〕

34. 『栗東歴史民俗博物館・展示案内』栗東歴史民俗博物館 1990
35. 『企画展 湖南の古代寺院 栗太郡の白鳳寺院を中心に』栗東歴史民俗博物館 1991
36. 雨森智美「栗太の官衙遺跡」『事例報告会 近江の官衙遺跡資料』栗東歴史民俗博物館 1993
37. 平井寿一「手原遺跡の発掘調査から」『湖南の古代寺院 第3回講演会資料』栗東歴史民俗博物館 1991

〔 その他 〕

38. 「早い開発を示す先人の足跡」『栗東の文化財』栗東町教育委員会 1986
39. 西田 弘「手原廃寺」『近江の古代寺院』近江の古代寺院刊行会 1989
40. 雨森智美「滋賀県手原遺跡と古代の地方官衙」『近江歴史・考古論集』畑中誠治教授退官記念論集 滋賀大学教育学部 1996



1992年度調査 (文献 6, 15, 22)



1992年度調査 (文献 6)



1992~93年度調査 (文献 7, 16, 24, 27)



1



2



3



4

1~4 瓦
(文献35, 39)



5



6

5, 6 石帯
(文献 6, 19)

報告書抄録

ふりがな	りっとうちょうまいぞうぶんかざいちょうさ ねんぽう							
書名	栗東町埋蔵文化財調査1995年度 年報Ⅱ							
副書名	－手原遺跡－							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	(編集) 近藤 広、雨森智美							
編集機関	財団法人栗東町文化体育振興事業団							
所在地	〒520-30 滋賀県栗太郡栗東町大字下戸山47 TEL0775-53-3359							
発行年月日	1997年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の 原因
		市町村	遺跡番号					
てはら 手原遺跡	栗東町手原 7丁目820	25321	滋賀県遺跡分布図 321-045	35度 01分 30秒	136度 00分 13秒	19950710～ 19951017	856㎡	倉庫建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
手原遺跡	官衙 集落 寺院	古墳時代 奈良時代 平安時代	掘立柱建物、塀、井戸、 溝、土坑		土器(須恵器・土師器・ 黒色土器)			

栗東町埋蔵文化財調査 1995年度 年報Ⅱ

—手 原 遺 跡—

発 行 日 1997年3月31日

編集・発行 (財)栗東町文化体育振興事業団
埋蔵文化財調査課

滋賀県栗太郡栗東町大字下戸山47番地 〒520-30

栗東町出土文化財センター内

TEL 0775-53-3359 FAX 0775-53-3514

印刷・製本 (株) ス マ イ 印 刷 工 業

滋賀県栗太郡栗東町大字川辺568-2 〒520-30

TEL 0775-52-1045 (代)